

ねえ東所長 新「静岡像」

立教学院 常勤理事
杉山順一さん

東京からこんにちは
静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さの可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

全カ・リを最初に導入

大手化学材料メーカーを途中退職し、母校の立教学院常務理事に就任。昨年退任したが、この8月、大学側の要請で再び経営陣に加わり、立教学院改革特命担当として学院の経営の一端を担う。

学院の中心・立教大学は建学以来、基礎教養を中心にした、いわゆるリベラル・アーツの理念を教育の柱に据えてきた。専門分野に限らず幅広い知識や総合的な判断力などを養うのが目的で、その一環として国内の大学で最初に全学共通カリキュラム(全カリ)を導入した。

「もちろん、グローバルリーダーの育成やフルイングリッシュ授業など、社会へ出て即戦力になれるスキルも身に付けてもらいます」。

全国の大学で初めての観光学部は、国内外の有名ホテル・旅館や大手旅行会社などに有能な人材を多数輩出、産学交流にも力を入れる。「インバウンド急増を受けての民泊新法施行など、観光学も状況の変化に合わせて学問を考えていく、ちょうどその過渡期です」。

「大学で装置産業なんです。少子化などの中で、どう脱皮を図っていくのか、この10年くらいで日本の高等教育機関の方向性は決まっ

しまうのではないのでしょうか」と見通す。

「呪縛」断ち発想を転換

静岡市のまちづくりについて「企業誘致や、若者を呼び込みたいとか何十年もやってきてなかなかうまくいかなかった。ならば切り口を変え、静岡のいいところを全部束ねて、それで何ができるかを考えたらどうでしょう」と語る。

杉山さんは「企業、若者、景気といった呪縛から離れて、まったく新しい概念の、静岡像を描いてほしいですね。時代の変化をにらみ、投資の先を分散するのではなく、そろそろ絞ってもいいと思います」と指摘。

新しい「静岡像」として、「家康公が隠居先を選んだ所ですから、例えば、定年を迎えた人にとつて、東京より住みやすい場所・環境を、売りにし、年金生活者が2LDK、80㎡くらいの低中層マンションに入居ができ、ゆったり過ごせますよ、というようなですね。しかし過度な税金の先行投入でなく、収支が合うような『知恵出し』もセットで準備したい。静岡でそれに十分値する場所だと思えます」。

(文・写真…長田義明)



Junichi Sugiyama

静岡市葵区生まれ。県立静岡高校卒業。立教大学経済学部卒業。1972年、日立化成工業株式会社入社。西中部日立化成住機株式会社社長、株式会社日立ハウステック取締役総合企画室長などを経て、2007年、学校法人立教学院常務理事、株式会社立教企画取締役会長、立教英国学院常務理事を歴任。17年、常務理事など退任。2018年8月、立教学院常勤理事に就任(立教学院改革特命担当)した。69歳。